未来を担う君たちへ

千歳市空港開港 100 年記念関連事業

- JAL 編 -

日本航空（JAL）が子どもたちに航空業界の魅力を知ってもらおうと、お仕事体験イベントを開催。パイロット、客室乗務員（CA）、整備士など飛行機に関わる人たちが、新千歳空港に集まった小学生に空の仕事の魅力を紹介した。

パイロットとCAが航空教室でお仕事紹介

子どもたちとともにJALのオフィスに入ると、パイロットの日隈機長と客室乗務員の堤さんが迎えてくれた。二人はこの日の航空教室の案内役。現役のパイロットと客室乗務員からお話が聞けるとあって、子どもたちの表情は、緊張しながらも期待に満ちていた。

客室乗務員が大切にしていること

まずは堤さんがマイクを握り、客室乗務員のお仕事紹介を行う。「CAのお仕事は、飲み物を配ったり食事を出したり、そんなイメージが強いかと思いますが、ほかにも大切な役割があります」

堤さんによると、何より大事なのは「目的地まで旅客を安全に送り届けること」だ。機内で病人が出れば応急処置をするし、火災が起これば消火器を使って消火活動をする。シートベルトや荷物棚を一つ一つ見ながら、離陸前の安全確認をするのも重要な役割だ。

みんな飛行機が好きなんですよね それがすごく伝わってきました

ボーイング 777 型機　機長
日隈 嘉優 さん
Hinokuma Yoshimasa

信濃小１年
末永 彪馬（ひょうま）さん

堤さんと一緒に機内アナウンスに挑戦。「ＣＡさんが『優しくお話しできたね』とほめてくれました」と喜ぶ。将来の夢はパイロットといい、「今日お話を聞かせてくれたパイロットさんみたいに、たくさんの国を飛び回りたい」と話していた。

夢や大切なものを運ぶ仕事

続いてお仕事紹介を行うのは、大型機ボーイング777のパイロット、日隈機長だ。飛行時間13500時間にも及ぶベテラン機長で、16歳のとき、アラスカに向かう飛行機のコックピットから見た朝日に感激し、パイロットになる決心をしたという。

「お客様の安全を守ることと、お客様に最高のサービスを届けること。この二つをいつも大切にして、私たちはお仕事をしています」

そんな日隈機長から、子どもたちにクイズが出された。次のうち、パイロットの仕事はどれ？というものだ。正解は一つとは限らない。

①飛行機の操縦
②雲を避ける
③お客様と荷物を守る
④みんなの夢や大切なものを運ぶ

正解は「全部」。日隈機長は④についてこう話す。

「僕はこれを一番大事にしています。飛行機に乗るときって、何かワクワクしませんか？おじいちゃんおばあちゃんに会うとか、お仕事で大事な商談に行くとか、皆さんが持っている夢や大切なものを運ぶお仕事を、僕はさせてもらっています。だから機内ではできるだけ快適に過ごしていただけるよう、日々努力をしています」

そして、こう結んだ。

「僕のモットーは『ベストのフライトはない』。でもベターはある。常によりよいフライトをを作り出していきたい。55歳、頑張ります」

整備士が解説！間近で見るA350

ヘルメットと反射ベストを身に着け、機材庫へ向かう。機材庫では整備士の荒木さんが、飛行機ごとのタイヤ紹介や、機体の凍結を防ぐ防除雪氷液の解説をしてくれた。中でも参加者の注目を集めていたのが、大型旅客機エアバスA350のタイヤ。人の背丈ほどもある大きなタイヤは、重量が約265kgと重く、交換するときには3人がかりとのこと。「飛行機の重さと環境にもよりますが、1日5回フライトするとして、2か月くらいは持ちます」とは、荒木さんが教えてくれた豆知識だ。

飛行機のお見送り体験を「いろいろな角度から飛行機を見られて楽しかった」と振り返る。新千歳空港の原点となった、約 100 年前の千歳村民が造成した着陸場に「みんなで力を合わせて頑張ったから、今の空港があるんだと思います」と思いを寄せた。

千歳小３年
川上 諒（りょう）さん

ランプエリアで飛行機のお見送り

機材庫からランプエリアに出ると、すぐそこに飛行機が駐機していた。特殊車両が何台も目の前を通り過ぎていくのを見ると、ここが普段は入れないエリアであることを改めて実感する。そこから歩いて向かった先には、エアバスA350が駐機していた。近くで見るとその大きさに圧倒される。荒木さんの解説を聞きながら、飛行機の周囲を見学して回る。

離陸の時間になりボーディングブリッジが外され、トーイングトラクターにけん引されたA350がゆっくりと動き出した。操縦席に向かって手を振ると、パイロットが手を振り返してくれた。まもなく滑走路に到着したA350は、エンジン音を大きく響かせ、目的地の東京へ向け飛び立っていった。

いつか航空業界の第一線で活躍を

航空教室を振り返って、日隈機長は話す。

「最初は緊張していた子どもたちが、話をするうちに楽しくなってきたんでしょうか、眼が輝いてきて。みんな飛行機が好きなんですよね。それがすごく伝わってきました」

堤さんも続く。

「私たち客室乗務員も、なかなかランプエリアでお見送りする機会はないので、お子様たちと同じ目線で一緒に楽しむことができました」

いろいろな国に、一緒にフライトしませんか？

客室乗務員
堤 真菜 さん
Tsutsumi Mana

パイロットと客室乗務員。どちらも子どもの憧れの職業で、この日イベントに参加した子どもたちにとっても同様だろう。だからこそ今回の経験は、彼らにとって特別なものとなったはずだ。

彼らの中に、この日を境に航空業界を志す人、またはその思いを一層強くする人が少なからずいる。そう断言できるような、有意義な時間だった。そうした人たちがやがて夢を叶え、日隈機長や堤さんのように航空業界の第一線で活躍する。そんな未来が、いつか訪れるかもしれない。